

# SPACE No.48

日本臨床心理身体運動学会会報第 48 号 2026 年 2 月 28 日

編集発行 日本臨床心理身体運動学会 会長 山中康裕

## 【第 27 回大会特集号】

2025 年 12 月 20 日（土）21 日（日）に、大阪府和泉市の桃山学院大学和泉キャンパスにおいて、第 27 回大会が、対面及びオンラインのハイブリッド形式で開催されました。会場となったエレノア館は 2025 年に新しく建設され、まだ木の香りする建物でした。そして中にはラーニングスペースやコミュニケーションスペースがうまく配されて、従来の教室の閉鎖性を感じさせない建物となっていました。そのような場でシンポジウムをはじめ、様々な発表や熱いディスカッションがなされました。

大会実行委員長、シンポジウム出席者、研究発表者からの文章を頂きました。今回の学会大会の雰囲気や思いが少しでも伝わり、参加された方には振り返っていただく縁（よすが）として、また、出席できなかった方には次回は参加しようと思っただく契機となればと思います。

### 「第 27 回大会をふりかえって」

木村 佐枝子（桃山学院大学）

第 27 回大会は、「こころの危機に添う—どう生きるか、いかに生きるか—」を大会テーマとして掲げ、6 つのワークショップ、会長講演、シンポジウム、事例研究発表、一般研究発表の全プログラムを無事に終えることができました。こころより御礼申し上げます。本大会では、高橋副実行委員長のご提案により、臨床心理系学部の大学生にも広く門戸を開き、受講の機会を提供することができました。また、ワークショップのいくつかは本学会の将来を担う若手の先生方にご担当いただきました。これは、これまでの大会にはなかった新たな試みであり、意義深い取り組みとなったと感じております。

シンポジウムでは、教育、事件・事故、災害、病、物語という 5 つの分野からご自身の経験や専門分野から話題提供いただきました。それぞれの分野が 1 つのテーマとして成り立つほどの領域ではありませんが、私自身はこの分野が重なり合い、響きあうことの相乗効果を期待していました。まだ十分に言葉にすることはできませんが、「心理臨床に従事して、最も意味のあることはクライアントの『こころに添う』ことであろう」（山中、2000）という原点に尽きるのだと、大会を終えた今も強く感じています。この姿勢がぶれることがなければ、「どう生きるか、いかに生きるか」を心理臨床家としてクライアントとともに歩んでいけるのではないかと考えています。本大会が会員の皆様にとって実り多く、こころに残る時間として共有することができたのであれば幸いです。



本大会は、静岡から大阪に移って2年目という私自身の環境の変化に加え、大学統合により新たなスタートを切ったばかりの桃山学院大学での開催となりました。人間教育学部の先生方をはじめ、オンライン配信や設営、設備・備品の準備を一手に担ってくださった情報センター・視聴覚事務室の職員の皆様のプロフェッショナルなサポートがなければ、大会運営は成し得ませんでした。また、大会の企画、準備から当日の運営に至るまでご尽力くださった実行委員の先生方（高橋幸治先生、前林清和先生、坂中尚哉先生、松井幸太先生、内田普子先生、興津葵先生、澁谷愛佳先生、北川将己先生）、大会当日の運営スタッフとして臨機応変に動いてくださった先生方（槇山春香先生、前田章先生、田口多恵先生、中島法子先生）、ゼミ生の皆さん、広告協賛いただきました企業様、多くの方々のご支援により、本大会を無事に開催することができました。こころより感謝申し上げます。

これまで学会大会の実行委員として携わる機会はありませんでしたが、大会実行委員長として運営全般を担うのは初めての経験でした。開催までの数カ月は「本当に大会を開催できるのだろうか」という不安に襲われ、私自身にとりましてもまさに「こころの危機」を体験する日々でした。この一年、私の「こころの危機」に添ってくれたのは、紛れもなく愛犬の「あめ」でした。身体を寄せて黙ってそばにいてくれたこと、時には私の愚痴に「ふん」（何言ってるねん）と鼻を鳴らして軽くかわしてくれたこと、その存在にとっても救われました。

第28回大会以降も盛会となりますことをこころより祈念しております。

## 「第27回大会に参加して」

川村 法彦（静岡県警）

日本臨床心理身体運動学会第27回大会が成功に終わりましたことを心からお慶び申し上げます。心理学の研究も臨床も生業にしている私がシンポジストとして登壇を打診された際、まず感じたことは私に何が伝えられるのかということでした。大会実行委員長の木村先生からは今までの大会にはない化学反応が見たいと言われ、知的探求心の強い私は専門的な研究発表に触れることで私の人生に新たな気付きを得ることができるかなと個人的な想いで登壇を受諾して大会に参加させていただきましたが、警察官という異業種の私の視点が皆さんの研究や臨床において、何かの気付きになることができたのでしょうか。静岡から警察官っぽくない面白い警察官が来たよねで終わっていないかと案じております。

私個人としてはAIと効率化の話がとても印象に残っています。心理学の学会でAIと効率化というテーマで盛り上がると思っていたという驚きとともに自分の仕事に通じる様々な考えにも触れることができました。

私は、タイパ、コスパ、即答性を求められる世の中であっても、一見して無駄と思われるようなことにこそ本質があるのではないかと日々感じております。

例えば、少年事件の取調べの話ですが、少年にいきなり「お前がやったのか」と答えを求めても、少年は心を開いてくれません。これはあくまでも私の経験に基づくやり方の1つなのですが、事件とは無関係の無駄話と思われるような会話、好きな音楽、ファッション、食べ物などの話をしながら、私と少年の共通項を探っていきます。このときに私に様々ないわゆる無駄な知識がインプットされていなければ、世間話を繰り返して共通項を探すこともできません。

ゴールまでたどり着いて後ろを振り返れば1本道ができていますが、前に向かって進んでいるときはこの道が正しいかどうかは分からず、右往左往しながら進んでいます。これをタイパが悪いと言われてしまうと警察の捜査も皆さんの研究・臨床もなかなかキツイものがあるのではないのでしょうか。

実は、この体験記を思案中の1月下旬、たまたま拝読していた作家中山七里著「有罪、とAIは告げた」の一文が心から離れません。小説自体は、AIの発展と人間の関わり方について、裁判というカテ

ゴリで問いかけているものになります。AI がスキルを上げれば上げるほど、怠惰な人間は身体を動かすのを渋るようになり、遂には考えることさえ放棄するようになる。切実な問題が発生しない限り、その流れは延々と続く。」という一文で、AI との向き合い方を間違えると、かえって様々な分野で悪影響を及ぼすと警鐘を鳴らしています。貴学会に当てはめれば、AI の飛躍的な発展が人間の心と身体の動きにどのような影響がでてくるのかといったところでしょうか。今後、どのような提起がなされるのか、楽しみにしております。



最後になりますが、心理学が一見して全く関係ないような警察業務でも活用されていること、様々な場面で心に傷を負った人々に警察官は日々寄り添っていることをあらためて皆さんに認識していただだけでも、今回、私が参加した意義はあったのかなと感じています。

大会に参加できてとても楽しかったです。本当にありがとうございました。

### 「一般研究発表を終えて」

坂中 尚哉 (香川大学)

2025年12月20日、21日の両日、日本臨床心理身体運動学会第27回大会が桃山学院大学（実行委員長、木村佐枝子先生）にて開催されました。今回の学会大会では、実行委員のメンバーながら一般研究発表もさせていただきましたので、何かと慌ただしく両日が過ぎた印象です。この度の会報誌では、十数年ぶりに一般研究を行いましたので、その所感を主題に記述したいと思います。

時遡ること半年ほど前になりますが、今回の共同発表者の中島登代子先生とグループ箱庭について雑談めいたやりとりをする機会がありました。特に、岡田康伸先生が著した「箱庭療法の展開」（誠信書房）内の“グループ箱庭療法の試み”を巡って、心理臨床家の訓練としての意義やイメージ拡充の面白さなどについて話し込みました。僕自身、細々とですが、かれこれ20年ほど養成大学院での授業にてグループ箱庭を単発的に行ってきたのですが、その都度、各グループの多様なイメージ表現、そして物語の展開に興味・関心を抱きつつも、この場で一体何が行われているのだろうか！？と十分に立ち留まって考えることをできていない、そんな自分を、中島先生との雑談時に気づき、愕然としたのでした。

あらためて自身のグループ箱庭の手書きの記録や画像をあさりますと、際立って印象に残っているセッションがありました。幸いにもそのセッションは音声記録もあり、急ぎ音声記録の逐語化に取り掛かりました。出来た逐語録を何度となく読み直すたびに、正直、言葉にできない何かを感じ、このセッションで一体何が起きているのか！？、これをなんとか言葉にしたいと思ったのです。幸いにも一般研究として採択していただき、今回の発表に至ったわけですが、グループ箱庭のプロセスをどのように提示すればいいものか随分と考えました。発表までに幾度となく中島先生とディスカッションを重ね、最終的には「プロセスを語る」ことで腹が決まりました。発表当日は、座長の中島郁子先生、指定討論者の仁里文美先生、フロアー・オンラインで参加の皆さんに見守られながら、グループ箱庭の1セッションを自由に話させていただきました。本当にありがとうございました。発表を終えた今、今後は、単発的なグループ箱庭のセッションではなく、岡田先生がなされてきたように同一メンバーとの長期的なセッションを実践したいと思った次第であります。

最後になりましたが、大会実行委員長の木村先生はじめ、会場校の桃山学院大学の関係者の皆様方の場づくりに感謝し、筆を置きたいと思います。

## 編集後記

12月も半ばすぎでの学会は、大阪であってもしっかりコートが必要な気温でした。しかしながら、学会会場は和気藹々と話し合う熱気に溢れ、発表者そして参加者が真摯に発表やシンポジウムに向き合う姿勢が常を感じられるものでした。多くが集まれるのは年に1度ですが、その会がいつも充実したものであることに感銘を受けます。 (仁里)

SPACE No. 48

日本臨床心理身体運動学会 会報第 48 号

2026年2月28日発行

日本臨床心理身体運動学会

会 長 山中康裕

編集責任 仁里文美

事務局 〒600-8449

京都市下京区新町通松原下ル富永町 107-1

株式会社 木立の文庫内

TEL : 075-585-5277

FAX : 075-320-3664

E-mail : office@rinsinsin.jp